

学位論文の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻 病態修復医学講座 肝胆膵・移植外科学分野	氏 名	小林 基之
-----	--	-----	-------

主論文の題名

Gemcitabine-based chemoradiotherapy followed by surgery for borderline resectable and locally unresectable pancreatic ductal adenocarcinoma: significance of the CA19-9 reduction rate and intratumoral human equilibrative nucleoside transporter-1 expression

主論文の要旨

【目的】

診断技術の発達した現在においても、膵管癌は診断時、既に全身病であることが指摘されている。局所進行膵管癌に対する手術を前提とした化学放射線療法(chemoradiotherapy followed by surgery: CRTS)は、その局所制御効果のみならず、再評価時での遠隔転移例の選択を可能とするなどの点から有用性が示唆されているが、その適応や治療効果は未だ議論の余地がある。局所進行膵管癌に対するgemcitabineを併用したCRTSの治療的意義を明らかにする目的で、UICC-T3, T4膵管癌をNCCNガイドラインの提唱する切除可能性分類に従って分類し、特に血清CA19-9値の減少率と腫瘍内human equilibrative nucleoside transporter-1 (hENT-1)に注目して検討した。

【方法】

画像及び細胞診・組織診にてUICC-T3,T4の局所進行膵癌と診断され、当院で作成した治療プロトコル: gemcitabine-based chemoradiotherapy followed by surgery (gem-CRTS) を受けることに同意した100例を対象とした。登録症例をNCCNガイドラインの提唱する切除可能度(resectable:R、borderline resectable:BR、unresectable:UR)で分類し、生存率に対する因子解析を行った。切除標本を用いて腫瘍内hENT-1(gemcitabineの細胞内トランスポーター)発現を免疫染色にて検索した。

【結果】

化学放射線療法を完遂できなかった2症例と、化学放射線療法後に手術を拒否した4症例を除いた94例が検討対象となった。94例中、Rは11例、BR43例、UR40例であった。3年生存率はR 60.6%、BR 27.4%、UR 4.6%であった。予後因子の多変量解析によりBR群においては、CA19-9の減少率(登録時と放射線学療法後で比較して50%以上の減少)が唯一の独立した因子であった。

94症例中63例に根治を目的とした膵切除術を施行した、63例中、Rは7例、BR36例、UR20例であった。3年生存率はR 83.3%、BR 33.0%、UR 7.8%であった。予後因子の多変量解析によりBR群においては、組織学的癌遺残度(R0)が、UR群においてはhENT-1の発現が、それぞれ唯一の独立した因子であった。

【結論】

我々のgem-CRTS療法は、たとえ局所進行の切除不能膵管癌であっても、再評価時に積極的切除の適応患者が選定でき、さらにhENT1発現例では予後の有意な改善が得られると考えられた。

(注) 2, 0 0 0字以内にまとめて記入すること。